帝京大学文学部教育学科紀要 36：21-28　　平成 23 年（2011 年）3 月

新潟付近明治23年測正式以前図の増補図

井口悦男

帝京大学文学部教育学科　〒192-0395　東京都八王子市大塚359

要　約

新潟県新発田（しばた）駐在の、第2師団（仙台）所属歩兵第16聯隊域には、この地域最初の実測図（迅速測図）に、明治23（1890）年測ローマ字入り、左横書き注記文字方式をとる縦長図郭中心の2万分1、同24年製版15面、すなわち、荒川以南、弥彦以北、白根島低湿地域を除く、日本海沿い平野域を図域とした図群が知られている。

今回この図群に、狭い範囲であるが、新たな増補図域を加えたもののあることに気付いた。その報告とともに、このような追加図域をもつ理由を考えてみた。

増補部分は、15面の多くの未測域に見られるのではなく、今回確認できたのは、わずかに3面の、かつ小範囲に止まる。そこは、最初の15面域に続けて作成される予定の隣接図との接続部にあたる未測域の一部を埋め、新旧図域を連続させる部分であった。

ただし、その部分の図描が、ローマ字抜き、右横書き注記文字方式をとる、次の27年版図群に採用されたものであることから、新図群図描の試行と、新図群との接続とを考えての、ごく部分的な図化域拡大を実施して、明治26年測域を広く予定していた、同27年版図の成功を前の予行と考える。

キーワード： 左横書き地名、右横書き地名、未測域、隣接図、ローマ字注記、縦長図郭、横長図郭

1

筆者が、新潟付近の正式以前地形図群の分布に、永年注目するようになったのは、仙台に師団司令部が置かれていた第2師団管内として、明治23（1890）年測、同24年版、ローマ字入り2万分1迅速測図、15面作成域として知られ、これ以後明治30年代に前記図域に若干加える図が存在するだけと思われていたにはじまる。

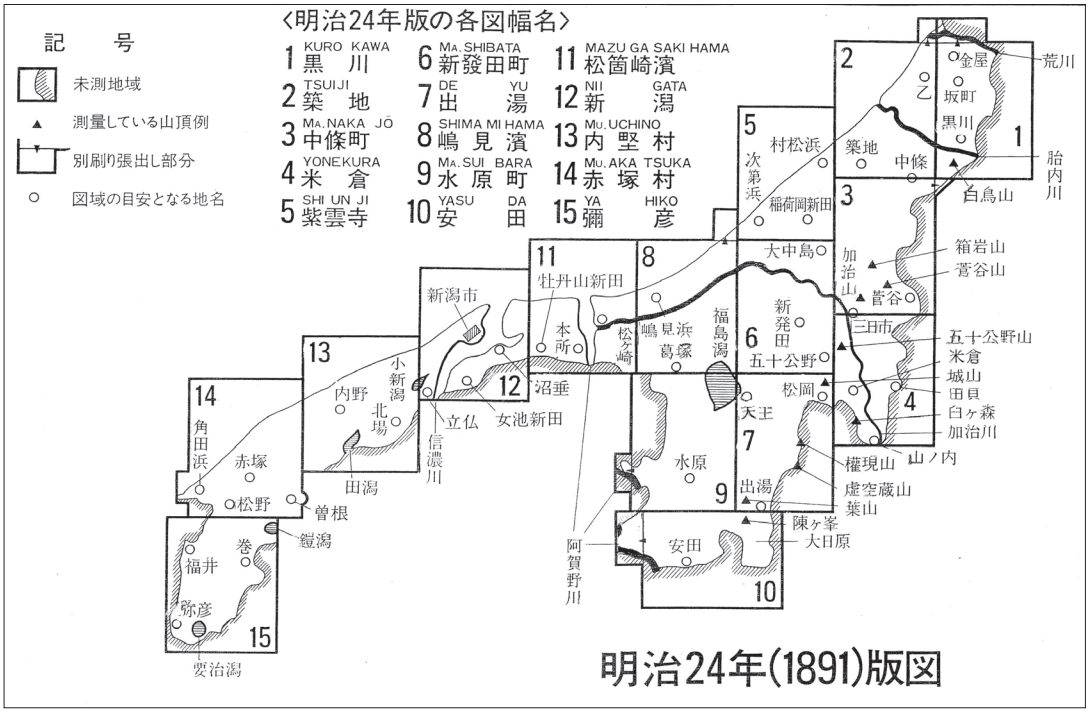
この15面の明治24年版は、荒川以南から阿賀野川域の安田（保田）迄、そして日本海沿いでは、さらに南下して、角田浜から弥彦付近に至る、新発田駐在「歩兵第16聯隊」の周辺、すなわちその守備域にして、かつ、通常演習域に該当する範囲を、正式地形図を中央官庁部署が測量し作図する20年ほど先行し、応急に図化した図域にその後増補した周辺若干の別域のものが見られた。

それが、上記図域に限られず、年を追い順次拡大されて、新潟県内各平野域に加え、県内主要河川沿いの街道筋の谷間、あるいは山越え区間を含めて、東山、西山各丘陵の低山域内全域を図化し、北は山形県境近くの府屋から、西は上越地方高田平野域を長野県境を越える各図が、ほぼ連続して2万分1を中心とし、後には、5万分1、あるいは2万分1から編集し直された図が、この地域に正式図の作成が達する明治末期（明治41、42年〈1908、09年〉測）までの間に、図域の周辺への拡大、さらに各図の部分的修正を含め、続けられていたことを、跡付けてきたことによる。

地方各地迅速測図の調査は、上記新潟地域に限ることなく、全国各地駐在軍作成の正式図の当該地域測図以前のばあいを主として、少数ながら例外的に、既に正式図成立後の地域での作成図にも触れた。その結果、正式図以後成立分も含めると、日本の主要平野域駐在軍による作成図は、大正期初頭までに、ほとんど全域に近く、それら平野に迅速測図として存在していたことを、順次明らかにすることができた。とはいえ、中央作成のいわゆる陸測図のばあいの一覧図、すなわち作図目録にあたるものが、ほとんど知られず、個人的努力による集積分布図に限られる状況で、市場に現われる現図群にまだまだ頼る面が大きく、全体像の確認には程遠い。

それはさておき、ローマ字地名入り新潟付近の15面、明治23年測図群は、筆者には、国土地理院保管のコピー図や、地図誌付録として復刻印刷された「新潟市」図に接することはできたが、同地域で後続図群にあたる、明

図1　新潟付近　明治23年測迅速測図　1982年井口による（**安田図の阿賀野川部分図描修正**）



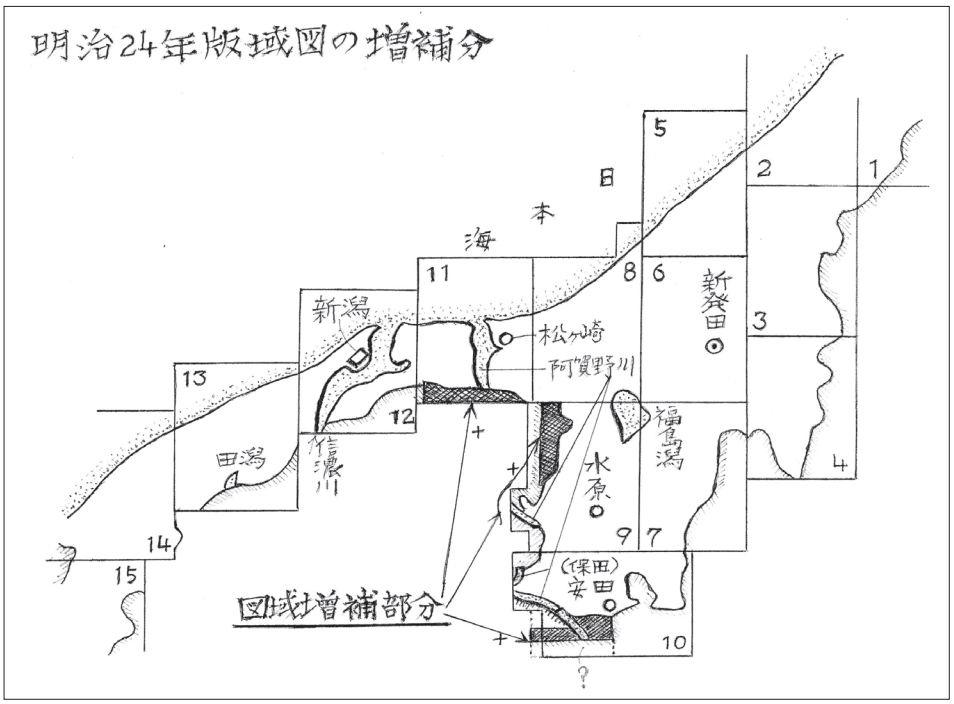


図2　明治24年版図の増補部分

既測（明治23年）域に隣接し発行予定の、同26年測27年版「亀田町」「五泉町」各図寄り既測図域内未測域部分で、図を増補していることに注目。従来のローマ字入り地名に対し増補図域の右横書きローマ字なしで区別ができる。

治26年測図をはじめとする以後各年代図に関する報告を開始した昭和57年（1982）以来、各地域駐在軍作成の迅速測図群には、追々広げられていったにもかかわらず、この新潟地域最初と見られる15面の実物には出会えないできた。

そして、4半世紀以上経過した最近、ようやく現物に接する機会をえた。ただし、手にしたこの図群の現状は、発行当時のままとはいえず、多くの図の主要道路に朱線が引かれ、とくに「新發田町」図は密となる。各図に、「歩兵第十六聯隊之印」とする角朱印の押されていることから、同聯隊所属将校か下士官が図に描入し、利用度を高めたとなろう。そして、最北部の「黒川」「築地」の2面は北半を、南方の「新潟市」「赤塚村」の2面は南半を、それぞれ欠き、さらに「彌彦は」欠図というぐあいであり、そのうえ、各図図郭外裁断状況のものである。

しかしその一方で、各図を見渡し、なかに従来知られているものと相違する図域を含み、少々増えている図であることに気付いた。これは新知見である。

この図の増補分は、現図を眺めると、本来別図で、従来図の図枠寄りの未測の白地部分に、重ねる形で貼合わせ、補充する方式と見られるが、それをすでに貼合わせ済としており、その接合が上手にされ、その境界が透かしてようやく分る場所と、道路や植生記号の接続ズレなどから、継ぎたし明瞭な部分とがある。それにしても増補図域をもつ理由は、どのように考えたらよいのだろうか。

2

明治24年版図15面中、増補図域のある図は、今回3図のうちで、かつ各図の図枠寄りと述べたばかりであるが、それぞれの図化域から見て増補域は、図枠線沿いの小部分に限られることが注目される。いま15面に、北から南に向け、さらに西へ仮番を付け、増補域のある該当図をあげると、それは、9)「水原町」、10)「安田」、11)「松箇崎濱」である（図1, 2）。さらに、これら3図の隣接図にも、存在しているのかもしれないが、現状から確かめようもないので、可能性に止まると言うほかない。

それにしても、9）～11）の各図に増補分が認められるところは、この図群では連続した形で図化されていない、キレギレに川の流れが描かれた阿賀野川の、右岸域を中心とする。それは、当初作図域として未測地扱い部分を補充したと見るのが自然と言えよう。

その補充と言うのは、日本の近代陸軍を育成指導した在日駐在武官メッケルによる、この地における大演習用図を意識し、新発田周辺ローマ字入り迅速測図を構想し、第2師団総合大演習あるいは第16聯隊の演習地域想定各図として作成された15面を、この作図を機会として、以後、第16聯隊用広域演習図に転用するには、当初決定された図化域周縁部では少々不足することを知って、急遽補測したことがさらに考えられてよい。

ローマ字入り明治24年版15面に対し、新たに北方では下越地域でさらに北へ少々図域を広げることからはじめ、西方の中越では、山地内を含め海岸沿いに多くの新図域を加え、全体として45面にも達した明治26（1893）年測、同27年版図群が、つぎに登場する。この図群は、最初の明治24年版図が、ほぼ縦長図郭であったのに対し、わずかの年代差にすぎないが、日本の地形図その後の定形にあたるヨコ対タテ3：2の配分による、横長図郭により、従来の15面もこれに合わせ、割り直しを施し、再発行され、全体をほぼ統一している。正式図のように経緯度を表現し、それを基準に図域を一定にするところまで整備されていないので、周縁部には縦長小図郭図が付加図として点在する迅速測図らしさがなお残る。

この前後の図群発行から、明治26年の新測域図を、同23年測域図の未測域に、旧縦長図の図郭に合わせ、描入増補したことも、当然考えられよう。この増補部分では、ローマ字注記はなく、したがって地名など注記文字の順も右からの横書きであり、同じ図郭内での注記の書き順の相違が目立つ（図3、次ページ）。

では、26年の新測域図の必要部分転写、描入かと言うと、増補部分の図描は、27年版図一般に見られる、やや行書的描法ではなく、24年版に見られる楷書的丁寧さを保ち、ローマ字や横書き順の相違は明白ながら、境界線の前後での描法の差は認めにくい。24年版図の追加描法によることを物語る。と言うことは、つぎの広範囲な、横長図群45面作成のための、少域でのテスト測量域として、選ばれたと考えられるのである。

その測量時期を詰めてみる前に、なぜ少域の増補、すなわち未測域の既測化を実施したのか。阿賀野川流域の平野部で、1面の図郭内の大部分が既に図化されたなかでのわずかな未測部分を既測地に組み入れることが、連続する3図域で実施されてはいるが、必ずしも全体として未測部分の図郭内での解消とはなっていない。すなわち、河口に近い、「松箇崎濱」図内、少々内陸湿地帯の多い「水原町」図内と2図域では、ほぼ完全に近く、これに対し、山の口に近い「安田」図内では、安田（保田）の町場の道路交差部に接続する地域の両岸一定部分に限り、新図域としている。これらはそれぞれ共通するのか、別々とされたのは、いま措くとして、これら各部分の図化が求められてのことに違いない。

常識的思考としては、明治23年測域に加え、そのつぎ

明治24年版域図の各増補部分の範囲と既測域あるいは明治27年版との図描比較（図3～8）

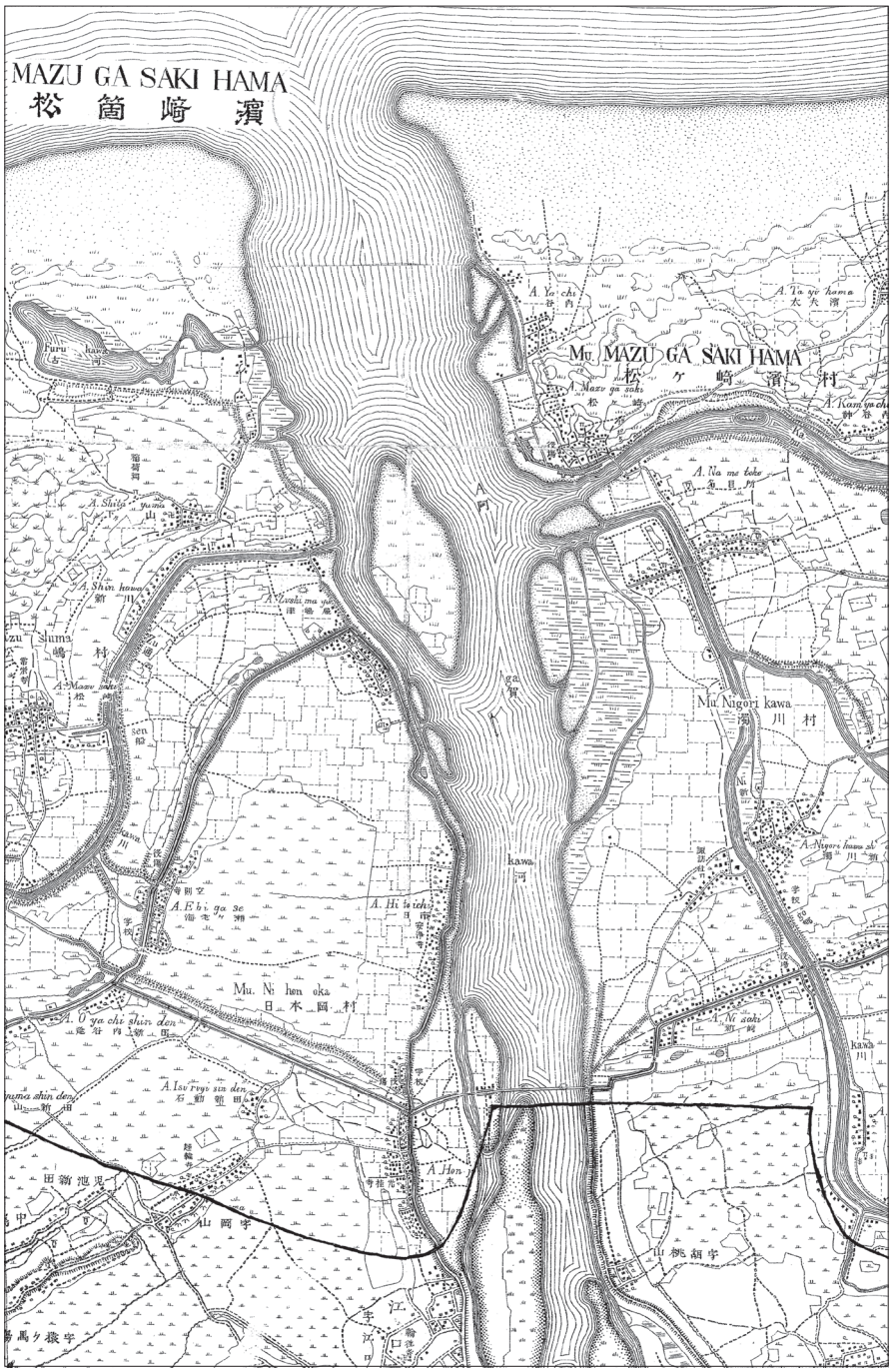
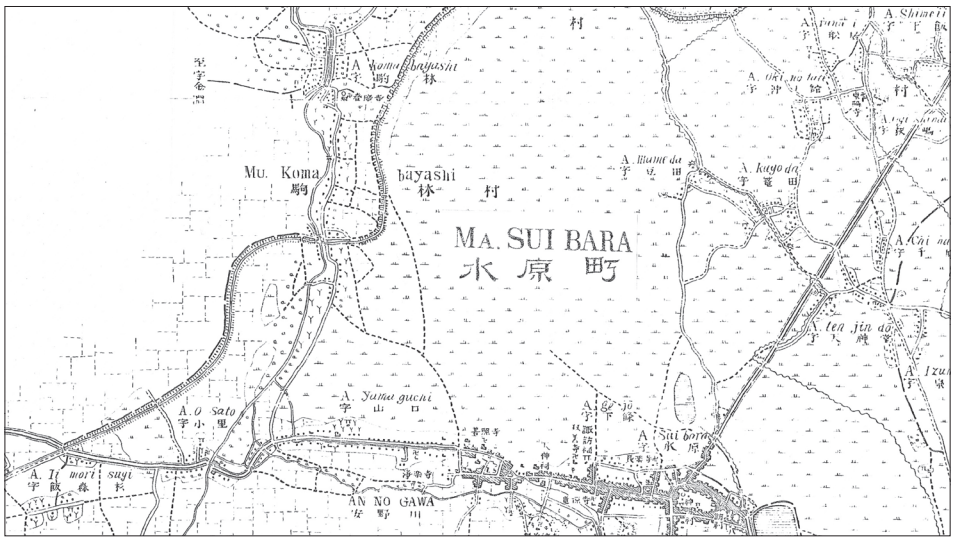


図3　松箇崎濱　明治24年版図＋増補図（図中南端墨線以南）

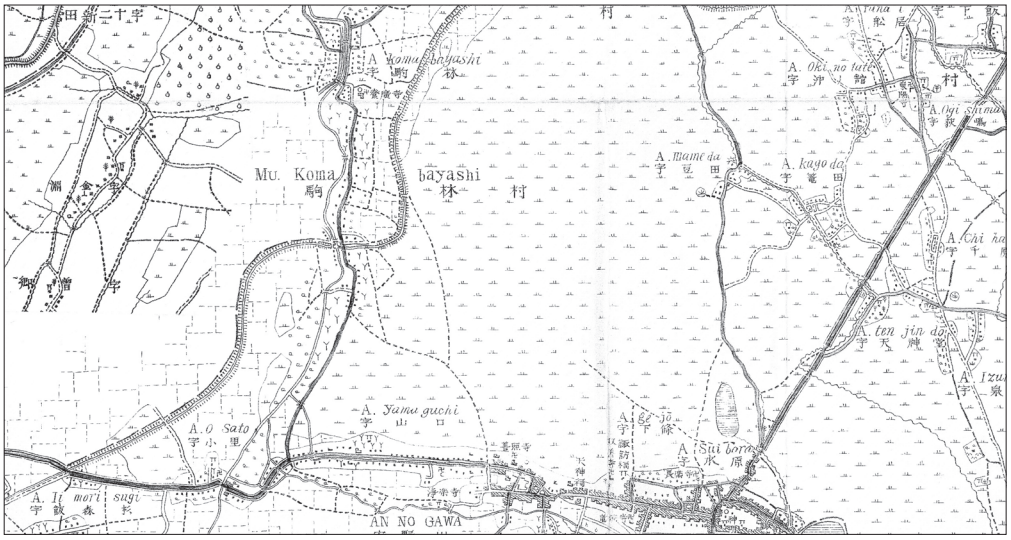
本稿掲示の地形図（図3～8）は、すべて2万分1図の50％縮小図につき、各図脇への縮尺、大きさ表示は省略

製版年（明治24年版、同27年版）による図名デザインの相違を、図中に仮に貼付し、参考に例示（図3、4、6～8）

図左上に未測地　明治24年版図　水原町　図4



水路向こうの未測地を埋めている　明治24年版図＋増補図　水原町　図5



丁寧な図描の24年版から比べ少々ラフな文字、線描に特色　明治27年版　水原町　図6

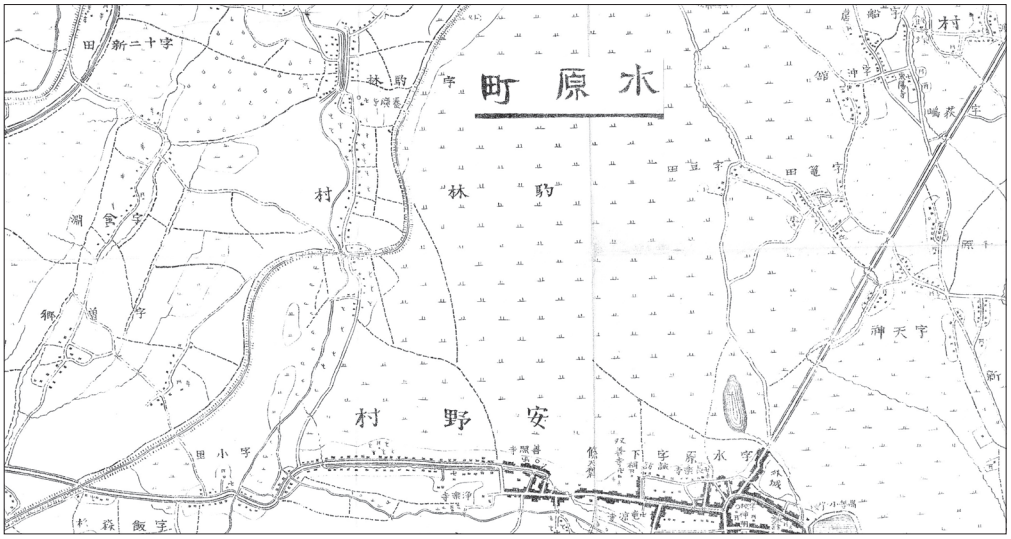


図7　明治24年版図　安田

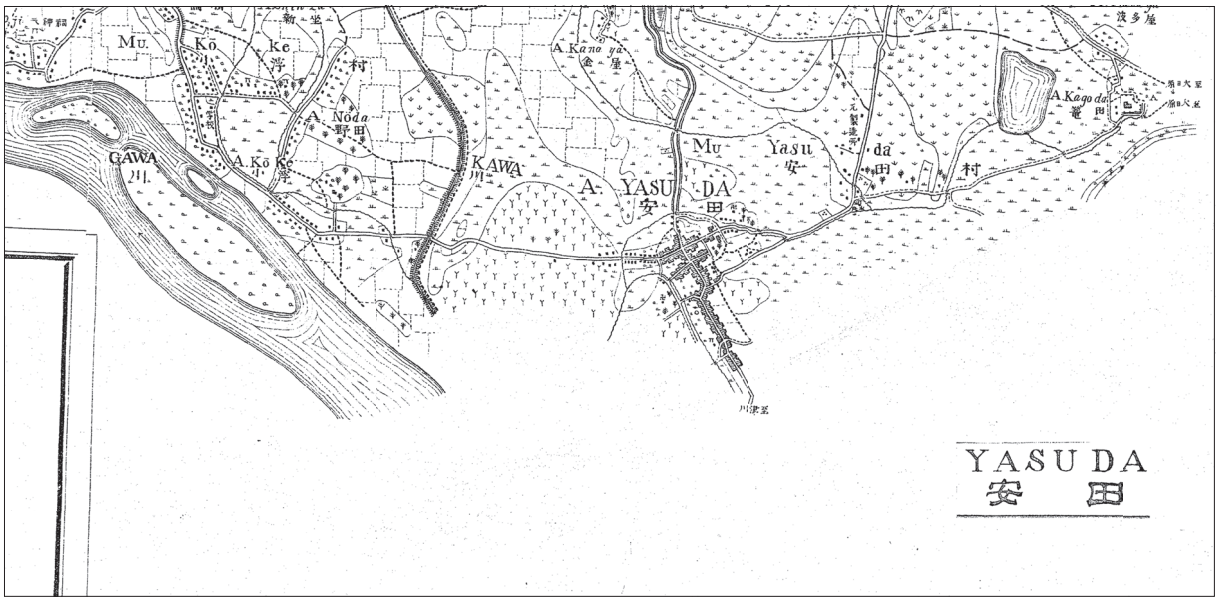
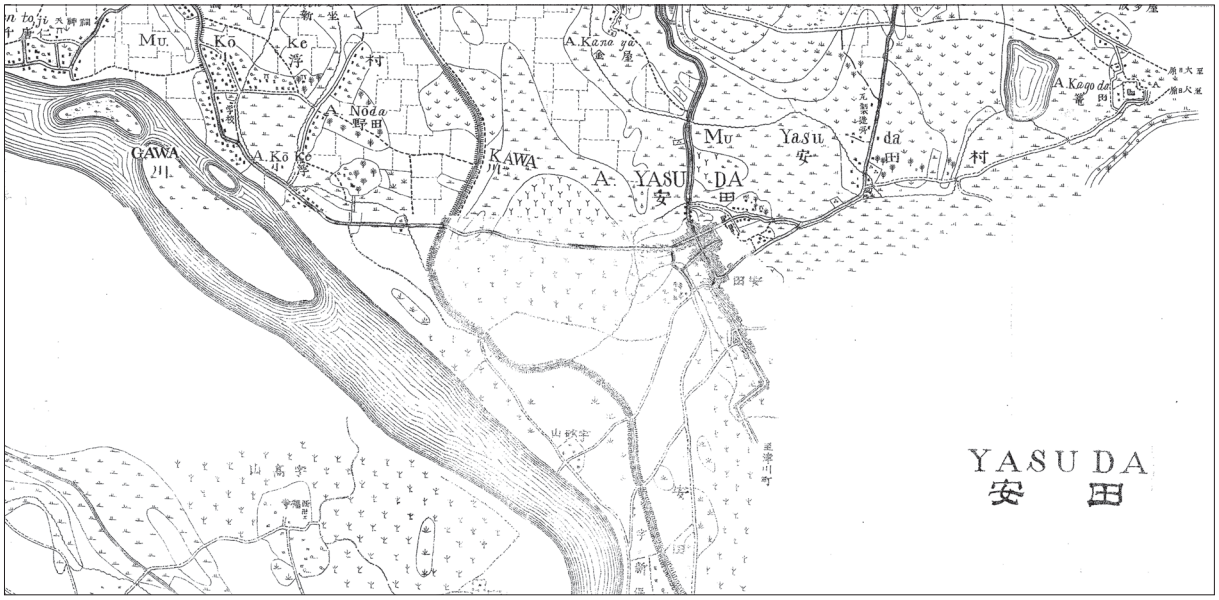


図8　明治24年版域図＋増補図　安田



増補域は、安田の町場止まりの図域を、西南の阿賀野川を南側図郭線まで測量し、両岸を新たに既測域（一部を除く）としている。

の作図となった同26年測域図作成準備と、新たな図描でまとめる試み図域とを兼ねて、手頃な範囲の新測地として、明治23年測域内の新しい隣接図側未測部分を選んだとなろうか。いずれにせよ、23年測の旧図域と、26年測の新図域との接続部分で、両者が隙間なしに接続してこそ、15面段階から45面続きに拡大して、地形図域として新潟付近の確実化が推し進められることを意味する。しかも、23年測域図内での増補図でありながら、すでに述べたように、ローマ字ヌキ右横書き注記と、23年測域図描によらず、次の26年測域図描によっていることは、単なる23年測域の不足分増補という、縦長図域群の新発田の歩兵第16聯隊用図としての、周辺部での不足、すなわち、少なくとも新発田を中心に眺め、西は阿賀野川まで正確な図が必要という要望、あるいは、徴兵されていた新発田周辺集落出身兵士たちの希望または対応のための図化域拡大などが頭のなかを去来する。

しかし、これら迅速測図が新潟県内平野域からはじまり、周辺へ通じる各街道域におよんでいることを前にするとき、そしてそのはじまりにあたる26年測域の広大な範囲の新図域図の作成のための試作域と考えたほうが、これ以後の図作成の流れと適合しよう。明治27年版図群がまとめて、同24年版図の縦長図郭から横長図郭に、27年版として、26年測図分と合わせ図域変更のうえ発行し直される以前に、15面図群図の一部に施された貼付増補図として、隣接することになる27年版新図とを接続させることを含み、先行発行されたのではなかろうか。と言うことは、24年版図の縦長図郭分を含め、全体を横長図郭に変更する段階で、旧測域と新測域との間で、キチンと一線上で接続を果たすまで整えられなかったが、縦長図と横長新図とによる接続の中間時期が、すなわち、24年版図のまま新図域に関し27年版新図と接続させることで、旧24年版図を使用可能として時期が、あったのではなかろうか。このことを、今回手にし気付いた増補図部をもつ縦長図群から、移行措置が考えられてならない。

3

ところで、明治24年版ローマ字入り縦長図群15面の増補付図の作成年代は何時であったのだろうか。ただし、はじめにお断わりしたように、今回手にした図が図郭外裁断図のため、図郭外に注記される、測年、あるいは製版年を図自身から求められない。従来知られている縦長図郭のローマ字入り図群が、明治23年測同24年版で、つぎの横長図郭による図群は、中心部が縦長図郭図の割り直しであるから、その後の修正、増補は別として、明治23年測であって、新図域は同26年測による同27年版図版となる。この中間の測年、版年図のことは知られていない。

したがって推定するほかないが、明治23年から同26年の間に求められよう。そのうえで、この年代の間のどこに可能性が大きいか。話は急に飛躍するが、仙台所在第2師団の管内各地駐在軍作成図成立状況を見渡すと、師団駐在地仙台周辺での面数が多数となるが、その他各地でも相応の面数に達し、新潟付近のばあいも結果的に、すでに述べてきたように100面以上、隣接聯隊、隣接県域にまで、各方向すべて図が接続するところまで、軍作成迅速測図が正式図成立以前に果たしてはいないが、少なくとも平野域をほぼつなぎ、さらに河谷、山路内にも図域を広げていったことは、すでに触れた通りである。

とすれば、明治23年にはじまり同42年にわたる期間中、ほぼ数年間隔で、ほとんど間を置くことなく（日清、日露など対外戦期を除く）、図域の拡大、修正、補充をはかっていることは、ひるがえって明治23年～26年の間では、同24年か25年のことと絞られてよかろう。今回の明治23年測図に増補部貼付図の測量時期として、つぎの明治26年測図のためのテスト版とすれば、明治25年測と考えるほうに可能性が高いとなろう。

明治23年測同24年版ローマ字入り図群に比べ、明治26年測同27年版の図域が格段に広く、山地域等高線描を山麓線一定高度で止めた24年版に対し、山頂部まで省略することなく完全に描入した、新潟地域最初の図群である。そのためか、24年版ローマ字入り外国駐在武官統管演習用図の整飾、注記など図描の丁寧さから比べると、同じ身内だけ使用図という気軽さが反映したのか、図描に荒さ、緩みが認められる。24年版に対し細やかさの欠落は、恐らく、広い測量域を比較的短日時で完成させる要請あるいは、速成願望が影響したとも言えようか。

明治末期、第13師団司令部所在地、高田（現、上越市）周辺図に限り、優れた繊細図描のものができている。一群の図全体に細やかさを保たせることは、迅速測図として正式図の図描の井然さにはおよびもつかないにしても、一定段階まで可能なことを物語る。それにしても、地形表現として複雑な谷形描写の技術的未熟さは、その全体表現として最初の明治26年測域で明白である。幾図にもまたがる山々のうねりは、平野内集落同士の位置関係、それらを結ぶ大小の道路そして河川、水路の表現のように、永年村絵図、国絵図として描かれた状況とは異なるため、日本中の平野域には、少なくとも江戸期に入って、実測図並み絵図が作成されていたが、傾斜地、山地の実測図は、ケバや等高線の描法を理解し、習熟するに至るまで、明治期以降少々時間を要していることが、専

門家ならぬ一般軍人の学習結果の図である迅速測図の初期成立図で露呈されている。

今回、わずか3図のうちで、図域の終わる図郭線近くの小さな未測部分を使い、新たな図が作成される前に、新旧接続部分で新しい図描の実験を試みたと、貼付形式の増補域は物語ると結論づけたい。（'10.8.31.初稿、11.10定稿）

文　献

井口悦男　1982　新潟附近の正式測図以前―明治27年版2万分1を中心に―　地図20-3　p.1～12. 第2師団作成（歩兵第16聯隊）明治23年測ローマ字地名入り縦長図郭15面と、明治31年版、同33年版図阿賀野川渓口地域図若干と少数の図存在域とされてきたのに、明治26年測横長図45面の広がりをはじめて報告するとともに周辺の路上測図が明治30～33ヵ年にわたり作成され、新潟平野中央低湿地白根島域を除き迅速測図が広く分布することを明らかにした。

井口悦男　1999　越後国平野域正式以前図成立考―明治20～30年代第2師団図作成順―　帝京大学文学部紀要　教育学　第24号　p.261～286. 上記発表からの時間経過の間で知りえた事実の報告。空白の白根島域図、明治31、32年版「新潟南方附近図群」の存在に加え、27年版図の修正図数も増やし、新たな周辺域図、高田（現、上越市）付近のほか、峠越え図いずれも明治33年版を加え、村松聯隊作成の村松～長岡間山中未測地なし図群の作成年代を周囲裁断図ながら、明治33ヵ年から同36年の間に広げた。

井口悦男　2007　信越地域5万分1迅速測図　帝京大学文学部教育学科紀要　第32号　p.9～25. 明治40年、高田に第13師団が増設された際、同41、42年に管内に5万分1で迅速測図が作成され、高田以南長野、上田、松本方面の新規測量に対し、既成図域新潟平野では2万分1から縮小編集され、この方面の新図測量は、山形の米沢への街道沿い図であった。この報告のおりに永く作成年代を詰められなかった、村松～長岡間未測地なし周囲裁断図群につき、明治33年測から明治34、35年測とするのが妥当と、図中のJR信越本線（当時北越鉄道）新駅、「押切」（明治34年9月開業）の描入から判定するところまできた。

井口悦男　2010　2万分1迅速測図越後「村松」集成図　帝京大学文学部教育学部紀要　第35号　p.61～76. 村松聯隊増設により作成された特定2万分1迅速測図。新発田聯隊により先に作成されていた新潟付近図群では、村松が4図にまたがる図域構成のため、新聯隊所在地を中心とする、縦長変則図を、村松周辺に限り、少なくとも2度（明治36～42年）編集時の修正を加え作成していたことが認められる。

井口悦男　2001　明治期迅速測図の基礎的研究　自家版　243p. 上記、1982、1999分所収。

「角川日本地名大辞典」編集委員会編　1989　角川日本地名大辞典　15　新潟県　2029p.

国立国会図書館参考書誌部編　1971　国立国会図書館所蔵目録（中部地方の部）昭和45年3月現在　国立国会図書館　154p.

測量・地図百年史編集委員会編　1970　測量・地図百年史　建設省国土地理院　673p.